

古典派経済学と『資本論』

時 永 淑 著

法政大学出版局

とき　なが　あかし
時　永　淑

1922年生。1951年、東京大学経済学部卒業。
現在、法政大学経済学部教授、経済学博士。
著訳書に『経済学史・改訂増補版』、『経済原
論』上巻、ミーク『経済学とイデオロギー』
『スミス、マルクスおよび現代』、ロスドルス
キー『資本論成立史』全4分冊、ケンブ『帝
国主義論史』（以上、法政大学出版局）、『経
済学説史』（編著、有斐閣双書）、『「資本論」
における「転化」問題』（御茶の水書房）、マ
ルクス『剰余価値学説史』全3巻（大月書店）、
ルクセンブルク『経済学入門』（岩波文庫）、
マルクス『資本論草稿集』第5、6巻（大月書
店）、その他がある。

古典派経済学と『資本論』

1982年2月9日　初版第1刷発行

著　者　◎　時　　永　　淑

発行所 財団
法人 法政大学出版局

〒106 東京都港区南麻布2-8-4

電話・03(453)0717／振替・東京6-95814

製版・印刷／三和印刷　製本／鈴木製本所

3033-40101-7710

はしがき

本書は、経済学史関係の拙論のうち、方法論、古典派経済学、『資本論』成立史という、三つの部類に適當と思われるものを選んで、一本に取りまとめたものである。本書に収録するにあたって手を加え整理しておくように努めたが、かなり古い論文も含まれていて、その作業には、おのずから限度があった。最近の多くの研究成果を考慮に入れ全面的に書き換えるなどということは、もはや不可能であった。むしろ、本書に所収の諸論文のうちには、従来多くの研究者によって取りあげられ批評の対象とされたものや、筆者自身のそれらに対する回答を含むものもあり、また、現在では入手困難なものも多いことを考えれば、一本とするにあたって、それらの論旨をそのままにしておくことは、うがや当であるように思われた。したがって、各論文について手を加えることも、新しい用字用語への訂正、各論文のあいだで重複した関係にある叙述内容の省略や簡略化、理解困難と思われるような箇所の文体の訂正や補足説明、その後出版された精確な原典や翻訳を参考にして引用文や文献挙示の仕方をできるだけ統一し参照文献も現行のものに改めおくなど、の範囲にとどめた。こうした点は、論文が古いものであればあるほど避けられないことであった。そのために、本文中でも、いくつかの初出論文については、その点を、注や補記の形で言及しておいた。ここでは、それらも含めて初出の掲載誌一覧を記しておくことにする。

第一部

I 「経済学史の研究方法について」、『経済志林』第三〇巻第一号所収、一九六二年一月。

II 「経済学史の課題と方法」(一)、『経済志林』第三五巻第二号所収、一九六七年五月。

Ⅲ 「経済学史の課題と方法(二)」、『経済志林』第三五卷第三号所収、一九六七年九月。

以上のⅠ、Ⅱ、Ⅲに収録した論文およびそれらとⅣとの関係については、第Ⅳ章冒頭の本文および注(本書、九二―三、ページ)に記しておいたので参照されたい。

Ⅳ 「経済学史研究の方法論批判」、『経済志林』第四九卷第四号所収、一九八一年一〇月。

ただし、そのうち「一 末永茂喜氏の批評について」の部分は、拙論「経済学史の研究方法的再論——末永茂喜氏の論文にふれて——」(『経済志林』第三二卷第二号所収、一九六四年四月)の要点のみを再録したもので、この点も、第Ⅳ章冒頭の本文とそれへの注、さらに、この第Ⅳ章第一節の初めを参照されたい(本書、九二―三ページ、および九三ページの注(2))。

第二部

Ⅰ 「マルクス経済学の『古典学派』論」(原題「古典派経済学」、『現代マルクスレーニン主義事典』、社会思想社、上巻所収、一九八〇年十一月。

Ⅱ 「スミスとマルクスにおける二重の社会像」、『経済志林』第四四卷第四号(アダム・スミス『国富論』公刊二〇〇年記念号)所収、一九七六年十二月。

Ⅲ 「リカード経済学の生成とその労働価値論との関連」、『経済志林』第二三卷第二号および第三号所収、一九五五年四月および七月。

この論文は最初二つの違った表題の論文として発表し、後者は「リカード『原理』の生成とその労働価値論との関連」という表題であったが、本書に収録するにあたって表題を前者のそれに統一し、後者に含まれていた解説的と思われる叙述部分は省略した。なお、その他の詳細については、この第Ⅲ章末につけておいた「補記」を参照されたい。

Ⅳ 「タッカーの『リカード利潤論の起源』について」、『経済志林』第二四卷第二号所収、一九五六年四月。

これは資料的関心から取りあげたもので、その点は、この第Ⅳ章末の「補記」を参照されたい。

第三部

Ⅰ―Ⅷ この全体は「資本論」の成立過程(1)(2)、『経済志林』第四〇卷第二号および第三号所収、一九七二年七月およ

び九月、を基礎としている。だが、その論旨の理解を容易にするために、『現代マルクスレーニン主義事典』上巻（一九八〇年七月）所収の筆者による執筆項目『経済学批判要綱』（マルクス）の叙述を第Ⅵ章の「一」および「付記」として挿入したり、さらに、この第三部冒頭の「まえがき」にも記したとおり、その後『資本論』成立史関係の精確な資料類が公刊されているので、典拠をこれらのものに改めておくなどの手を加えておいた。それらによって基本的論旨はもちろん変わっていないが、しかし、資料的には、いっそう精確な形で成立史の過程を知ることができるようにしておいたつもりである。

（付）本文末尾の「付記」にも記したとおり、第三部の内容は「一八六一一六三年、経済学批判ノート（二三冊）」に関する理論的諸問題を指摘することによって終わっている。その後の『資本論』全三部の成立過程については、今後、新しい『全集』（MEGA）の該当部分の公刊によって資料的に明らかになることと思う。現在では、さしあたり、既発表の拙訳、ロマン・ロスドルスキー『資本論成立史』（全四冊、法政大学出版局、一九七三―七四年）の第四冊末尾に所収の「解題、『要綱』から『資本論』の成立まで」のなかの、その後の時期に関する資料的概観を参照されたい。

これらの論文を一本に取りまとめることになったのは、直接には、前々から法政大学出版局の稲義人君に勧められていたからであるが、しかし、その決断はなかなかできなかった。一つには、すでに通史的な形で『経済学史』（改訂増補版、法政大学出版局、一九七一年）のなかにある程度私の見解を明らかにしていると考えていたからであり、もう一つには、長年にわたってそのつど発表してきた諸論文がそれ自身問題提起的な形になったものが多く内容的に完結的なものとなっていない性格のものが多かったように思われたからであった。だが、その『経済学史』の著書にしても、「はしがき」の「改訂増補にあたって」の箇所に記したとおり、最初に出版したのは一九六二年であり、「改訂増補版」を公刊してからでもすでに一〇年以上の歳月を経過している。その間に、まったく蝸牛の歩みとはいえ、私の理解にまったく発展がなかったわけではなく、事実、その点を示す拙論もいくつか発表してきている。さらに、その間に、私の経済学史の方法論は私自身としては変更を要するようには考えないが、しかし、多くの学史研究者からは、

その方法論に基づく右の『経済学史』の拙著が、「通史というよりも問題史的な研究とみることができる」というように評価され一種の「異端」的な学史として取り扱われる傾向が定着してきているように思われる。確かに概説書的な経済学史の著書が多い現状からすれば、経済学史を中心的には原理論の生成発展史として考察しようとする私の学史研究は、たとえ私自身は通史的事であることをも心がけたつもりであっても、やはり「問題史的な研究」として「異端」視されるのは避けられなかったことかもしれない。しかし、他面からすれば、学史研究のこのような現状は、私の『経済学史』の内容はともかく、私には学史研究の自滅化傾向でしかないように思われる。というのは、多様化した学史研究のうち特殊的・個別的な形で書誌的ないしは基礎的な研究についてはともかく、経済学史という研究分野を全体的に念頭に置いた場合、ただ包括的・概説的であることだけを心がけて、中心となる統一的課題が不明確なままである状態に終始したのでは、そのような学史研究は、経済知識の累積という範囲にとどまる傾向が強くなって、学史研究において主要な作業過程となるはずの、従来の諸学説に対する精確な批判的検討も不十分にしか行なわれないうと考えられるからである。このような傾向こそが、実は、近年、経済学の「危機」とか「崩壊」などと呼ばれるような事態をひき起こす一因にもなっているのではないか、と思う。しかも、こうした事態は、経済情勢が国内的にも国際的にも多様化し緊迫の度を深めるに伴ってますます深刻化し、こうした経済情勢の急激な変化に対応して次々にただ一見説得的であるかのような新造語を生みだし現象的説明だけに終始するような状況となって現われているように思われる。

こうした実状を考えると、経済学史の研究に立ち返って経済学が社会科学の基礎的研究分野としてもつ意義を再検討するという、その原点からの反省が今日ほど深刻に要請されている時代はない、と言うこともできるであろう。もちろん、私のこれまでの学史研究の方法論理解やそれに基づく諸論文が、それに答えるものになっているなどとは毛頭考えないが、それにしても、その点の多少の反省材料としては役だつものではなからうか、と思う。一本に取りまとめることにしたのは、そのような意図によるものでもあった。

本書に収めるための諸論文を読み返しながら思い出されるのは、やはり宇野弘藏先生のことである。だが、それだけではない。すでに故人となられた先生方から、どれほど多くのことを学んできたか計り知れない。本書の第一部冒頭に収めた論文を発表したい、最初にその論文に触れて忌憚らない意見を開陳され私に大きな学問的刺激を与えられたのは末永茂喜先生であった。また、最も近い時期に亡くなられた高木暢哉先生には、本書の第一部第四章に所収の論文中に記したとおり、ずいぶん前に私の学史方法論について詳細な批評をしていただきながら、私が遅延に遅延を重ねていたために、その批評に答えるために書いた拙論を、お見せすることはできなかった。計報に接したのは、その拙論の校正を終えたときであった。その間に亡くなられた他の諸先生方にも、ずいぶん多くのことを学んできた。また、本書のなかで、その所説に、いろいろな形で言及した多くの諸先生、諸先輩、同学の人々からも学ぶことが多かった。深く感謝の意を表しておかなければならない。

本書第三部に所収論文の資料考証は昭和五四年度法政大学特別研究助成金の助成を受けて行なわれた研究の一部であり、本書の刊行に当たっては財団法人日本生命財団の刊行助成を受けた。また、本書刊行のさいの校正作業については法政大学出版局の五味雅子さんに一方ならぬお世話になった。厚くお礼を申し上げておきたい。

一九八二年一月一日 除夜の鐘を聞きながら新年を迎えて

時 永 淑

目次

はしがき

第一部 経済学史の方法論

I 経済学史の研究方法について	3
-----------------	---

まえがき——方法論の抽象性と学史研究の課題——	3
-------------------------	---

一 方法論に関する従来の諸見解	5
-----------------	---

二 研究方法の諸類型とその難点	11
-----------------	----

三 学史における歴史と理論——諸類型との関連において——	18
------------------------------	----

四 学史における歴史と理論——経済学の理論的体系化との関連において——	26
-------------------------------------	----

II 経済学史の課題と方法(一)	35
------------------	----

一 経済学史にとっての基礎過程	35
-----------------	----

二 資本主義生成期における商品経済の発展傾向	45
------------------------	----

三 資本主義の、いわゆる純粋化傾向	57
-------------------	----

四 商品経済の発展傾向に関する補論	65
-------------------	----

Ⅲ	経済学史の課題と方法(二).....	70
一	経済学史における理論的抽象.....	70
二	資本主義生成期における理論的抽象の問題.....	72
三	理論史としての相対的独自性.....	86
Ⅳ	経済学史研究の方法論批判.....	92
一	末永茂喜氏の批評について.....	94
二	出口勇蔵氏の批評について.....	108
三	高木暢哉氏の批評について.....	119
四	吉田静一氏の批評について.....	126
五	五味久寿氏の批評について.....	137
	第二部 古典派経済学	
Ⅰ	マルクス経済学の「古典学派」論.....	151
一	「古典学派」の規定.....	151
二	生成.....	153

三	確立	158
四	解体とその限界——マルクスの古典派経済学批判——	162
Ⅱ	スミスとマルクスにおける二重の社会像	167
一	はじめに	167
二	社会把握における基礎認識の相違	174
三	『経済学批判』におけるスミスとマルクス——マルクスの価値論との相違を中心に——	188
四	『国富論』第一篇第五章と第六章以下との問題 ——マルクスのスミス価値論・価値尺度論批判に関連して——	201
Ⅲ	リカード経済学の生成とその労働価値論との関連	218
一	意 図	218
二	穀物法論争の背景	220
三	一八一五年二月の『試論』前におけるリカード理論の構想	227
四	『試論』前におけるリカードのマルサス需給説批判	240
五	『試論』における地代論の解決と労働価値論導入の端緒	250
六	労働価値論の明確化と『原理』初版の構成	261

七	『原理』初版におけるリカード的労働価値論の破綻……………	274
IV	タッカーの『リカード利潤論の起源』について……………	283
第三部	『資本論』の成立過程	
	まえがき——『資本論』成立史の研究について……………	305
I	唯物史観の成立と経済学研究の開始（一八四〇年代）……………	310
II	『経済学批判要綱』への過程とその執筆……………	325
III	『経済学批判要綱』関係の諸草稿……………	335
IV	『（経済学批判のための）序説』と「経済学の方法」……………	342
V	構成プランの変遷	
	——『要綱』から『経済学批判（第一分冊）』（一八五九年）までの時期……………	346
一	『序説』中の五分割プラン……………	348
二	「七冊のノート」のノートⅡのプラン……………	352
三	一八五八年四月ごろのプラン……………	355

VI	『資本論』への出発点としての『経済学批判要綱』	360
----	-------------------------	-----

一	「七冊のノート」とその基本性格	361
---	-----------------	-----

二	理論的諸問題	366
---	--------	-----

VII	『経済学批判（第一分冊）』（一八五九年）の形成	383
-----	-------------------------	-----

一	一八五八年四月—六月段階	383
---	--------------	-----

二	『経済学批判（第一分冊）』の原初稿	387
---	-------------------	-----

三	『経済学批判（第一分冊）』（一八五九年）	396
---	----------------------	-----

VIII	経済学批判体系成立史上の理論的な諸問題	
------	---------------------	--

——	「一八六一—六三年、経済学批判ノート（二三冊）」までの時期を中心として——	409
----	---------------------------------------	-----

一	『批判』執筆終了の時期	409
---	-------------	-----

二	一八六一—六三年の時期	413
---	-------------	-----

三	六部門分割プランとマルクスによる『資本論』の包括範囲の限定	435
---	-------------------------------	-----

あとがき

第一部 経済学史の方法論

I 経済学史の研究方法について

まえがき——方法論の抽象性と学史研究の課題——

はじめにはっきりさせておきたいことは、経済学史の研究方法というような問題は、単に抽象的な方法論上の問題として解決されうる性格のものではない、ということである。このことは、当然のことかもしれない。しかし、かつて数年前、『資本論』のプラン問題が盛んに論議された際、ある論者がその論争について、『資本論プラン』論者のプラン・フェティシズム」と評したのも、プラン問題を、文献詮索的技術論をもって単に方法論的に処理しようとする傾向がみられたことにたいし警告の意味からなされたものであろうし、また、直接ここでの問題に関連していえば、かつて一九五四年秋関西大学で開催された経済学史学会の大会で「経済学史の方法論」が共通論題としてとりあげられ五人の報告者によってシンポジウムの形式で論議された際、その内容が——多少の語弊はあるかもしれないが——せいぜい報告者の意見拝聴程度にとどまり興味ある討論内容にならなかったのも、やはり、論議があまりに抽象的一般的にすぎて問題を単に方法論的に処理しようとしたことに原因があったと言える。そのため討論内容がいかに多岐にわたり——それによって学史研究者の研究態度がいかにまちまちであるかは明らかにしたけれども——見るべき内容に欠けた不鮮明な問題意識に終始し、単に解説的論議に終ったことは、そのときの大会参加者高島善哉氏の大会報告記事（『一橋論叢』第三三巻第三号、一九五五年三月）にみられる氏の印象のとおりであり、また報告者

の一人であった相沢秀一氏が、『経済学史の方法』と題する論文の「はしがき」で、氏自身「どんなことを報告し、どんなことが問題点として討論されたか、全く記憶から失せ去って思いだされない」(『経済学雑誌』第四二巻第一号、一九六〇年一月、二ページ)と言われているほどである。

したがって、この小論でも、経済学史の方法論について、それが抽象的に単なる方法論上の問題として処理されるものでないことは、はっきりと念頭においておきたい。そのうえで、この問題をとりあげるとすれば、そこで論議される学史方法論の成否は、やはり、それぞれの研究方法をもって展開されてきた——あるいはこれから展開されようとする——経済学史の具体的内容Ⅱ本論とのかかわりにおいて検討されるべき性格のものと云わねばならない。総じて、経済学史の研究方法というような問題が、それ自身単独に別個の問題として論ぜられることが少なく、主として経済学史関係の書物の冒頭にとりあげられることが多かったのも、このような関連からであらう。こうした学史関係の研究書では、方法論の問題は、単に序論的地位において一応の挨拶代わりに述べられるというのではなく、その方法論をもってする内容Ⅱ本論全体との具体的ななかわり合いにおいて、その内容Ⅱ本論に対するいわば導入部として重要な役割をもつものとして書かれねばならないし、また大体においてそのように書かれてきたと言いうことができる。

ここで、学史の方法論という問題をとりあげるのも、やはり、私なりの経済学史の内容Ⅱ本論にとってのいわば導入部として、それを検討してみようということにはかならない。したがって、それは、学史の研究方法を、単なる方法論上の問題として検討するというものでもなければ、また、学史研究者の研究態度や心がけそのものを論じようというでもない。むしろ、経済学史が社会科学の一分野としてどのような課題をもちまたその課題がどのようにして果たされるべきか、そうした経済学史の科学としての基本的性格にもかかわる問題として、それを反省的に再検討し、それによって同時に、私なりの経済学史の内容Ⅱ本論に対する導入部として学史の方法論にふれてみようというわけである。